

< 博士学位論文要旨 >

JAITS

論文題目：日中翻訳分析における選択体系機能言語学の役割についての考察（英文
題目：Study on the Role of Systemic Functional Linguistics in the Analysis of
Japanese-Chinese Translation）

提出者：王 珍珍

授与機関：神戸大学大学院文化学研究科

取得学位の名称：博士（学術）

学位取得の方法：課程

取得年月日：2011年3月25日

和文要旨

翻訳学を発展させるために、基礎研究として様々な翻訳現象を記述し解釈する必要がある。翻訳は人間の言語コミュニケーション活動の一種であり、訳文テキストは最終的に言語によってしか具現し得ないものであるため、言語学とは相互に緊密な関連を有することとなる。しかし、50年代までの伝統的な言語学は言語のしくみや文法記述に重点を置いたため、異なる言語・文化間コミュニケーション行為としての翻訳を解釈するのに不十分である。60年代から発展した選択体系機能言語学(Systemic Functional Linguistics 以下 SFL)は言語の形式だけではなく、言語が用いられるコミュニケーションの場面や社会文化のコンテキストをも考察対象としている。SFLはテキストの作成者と読者の間に存在する様々な条件やテキストを取り巻く文化と状況のコンテキストなどをすべて網羅し、それらが最終的にどのようにテキストに具現されるのかを全面的に考察できる言語学の理論であると思われる。

本論文は機能主義的翻訳理論の立場を取り、翻訳を静的言語現象ではなく、異文化コミュニケーション行為と捉える。そして、翻訳のプロセスを翻訳者が主体的に訳文テキストを作成するプロセスであるとする。本研究では、SFLの枠組みを全面的に用いた翻訳分析モデルを提案し、個々の訳文分析により翻訳行為が行われるプロセスにおける多様な可変要素と、訳文テキストが成立するのに決定的な要因を究明することを目的とする。

第2章においては、本研究の理論的基盤となる談話分析とハリデー(M. A. K. Halliday, 2001)が提唱するSFL、そして機能主義的翻訳理論の理論的背景について概説した。言語のしくみや文法構造という静的な言語現象に重きを置く伝統的言語学とは対照的に、談話分析はコミュニケーションにおけることばの果たす役割に目をむけ、その多様な諸相を総合的に捉えようとする。このアプローチにおける機能主義的言語理論の代表として、SFLが取上げられた。SFLは言語の表層構造とコミュニケーションにおける社会的機能の双方に目を配り、言語の形式だけではなく、言語外にある大きな環境も取り込み、言語使用の様々なあり様を体系的に考察しようとする言語学

WANG Zhenzhen, "Study on the Role of Systemic Functional Linguistics in the Analysis of Japanese-Chinese Translation," *Interpreting and Translation Studies*, No.12, 2012. pages 315-318. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

である。そして SFL では、言語行為は無意識的な行為ではなく、必ず意図・目的のある意識的行為であるとされている。その点において、SFL は翻訳を人間のコミュニケーション行為であると捉える機能主義的翻訳理論と同様な立場に立っていると言えよう。起点テキスト(Source Text、以下 ST)との等価を重視する従来の翻訳理論とは異なり、機能主義的翻訳理論は ST を情報提供と考え、目標テキスト(Target Text、以下 TT)のテキスト機能を重視している。その代表者であるフェアメーア Vermeer は翻訳でなすべきことは ST の再現でも原著者の意図の再現でも読者への効果の再現でもなく、翻訳読者との新たなコミュニケーションを成功させることだと考えている。彼は翻訳行為で最も重要なのは翻訳の目的(スコプス)であるとするスコプス理論を提起した。この視点では、翻訳においてコミュニケーションの主導権は原著者の側にあるのではなく、何をどのように翻訳するのかを最終的に決定するのは翻訳者である。スコプス理論は翻訳を主体的な異文化間コミュニケーション行為と捉える上で、非常に有効であると思われる。しかし、翻訳者が訳文テキストを作成する際、目的は勿論重要な決定要因として否定できないが、読者とのコミュニケーションを成功させるために、コミュニケーションを取り巻く状況や関連する諸要素を全て考慮した上で、最適だと思われる翻訳方法を選択する必要がある。もっと広い範囲で TT の作成プロセスに影響を与える要因を考察するため、テキストの表層構造と伝達機能を網羅する SFL の枠組みを日中翻訳分析のツールとして応用することにした。

第 3 章では、SFL の枠組みを用いて、コンテキストの要素とテキスト表層構造の両方を視野に入れる日中翻訳分析の分析法を提案した。この分析法に従い、ST(日本語)と翻訳行為の産出物としての TT(中国語)を対照分析することにより、翻訳者が実際どの状況下でどういう目的で TT を作成しているか、どのように TT の受容を想定しているか、どういう方法を用いて、ST の情報を TT の読者に伝達しているか、そしてなぜそのような選択をしたのかという TT の作成プロセスを全面的に考察できると考える。SFL は英語を基礎として発展してきた言語理論であるため、語彙文法層の概念をどの個別言語の分析にも適用できるとは限らない。本研究は日中翻訳を分析対象とするため、第 4 章において、日中両語の語彙文法層における過程構成、叙法構成、モダリティ、テーマ展開、結束性の特徴について、比較分析を行なった。

翻訳する際、これから作成する訳文テキストはどのような種類のテキストであるかを確定する必要がある。ST と TT との対照分析を行う際にも、分析対象とするテキストのジャンルを決めなければならない。しかし既存の ST と TT のジャンルが多様であり、本論文では、紙幅の関係で全てのジャンルの具体例を羅列することが不可能である。本研究では、ライス Reiss (1971) によるテキストタイプの分類法を参照し、多様なジャンルから代表的な例として、表出機能が重んじられる「表現型テキスト」の文学的テキスト、訴え機能が重視される「効力型テキスト」である広告テキスト、そして叙述機能が優勢な「情報型テキスト」の専門書のテキストの実例を取上げた。そして第 5 章、6 章、7 章において、それぞれのテキストへの応用分析により、第 3 章で提案した分析法の有用性を検証した。

第 5 章では、文学的テキストの実例として、村上春樹著『ノルウェイの森』とその 2 つの中国語訳を分析対象とした。ST と中国大陸で出版された林少華訳と台湾で出版された頼明珠訳を比較することにより、文化と状況のコンテキストの差が訳文テキストにおける語彙文法層の差としてどのように表れるかを例示した。林訳は出版するという目的で訳文テキストを作成した。文学作品に対して

美的効果を重視する大陸の読者に受け入れやすいように、林訳は読者に美しい感銘を与える四字熟語と修辞法を大量に用いた。林訳は、訳文テキストとは思えないほど美的な効果をあげている。しかし ST の境地を余分に推察し、ST に忠実でない誤訳が存在している。語彙文法層の分析からも、林訳は ST との類似度が低いことが判明した。しかし、その翻訳方針で作成された訳文テキストは大陸の読者たちに非常に優美であると高く評価されている。一方、頼訳は ST 特有の文体を台湾の読者に紹介するために訳された。ST の語彙文法層との類似度が非常に高いことがまさにその目的の表れである。その結果、ST の形式をそのまま TT に移したところが多く、台湾の読者に戸惑いを与えた可能性がある。しかし、頼訳は日本文化の影響を深く受けていた台湾で作成され、そして ST と同様に、経済高度成長を終え「都市型社会」への変貌期という社会的背景を持っている。このような特別な社会文化的背景があるため、頼訳は拒否される結果にはならず、大きな反響を呼んだのである。同じ ST でありながら、訳文テキストが作成される社会文化的背景と目的、作成者と読者との関係を含む文化と状況のコンテキストの違いによって、まったく異なるストラテジーの取られた TT が成立することを、具体例の分析により実証した。

第 6 章における広告テキストの分析では、通販カタログ『暮らす服』に掲載される女性服を紹介する広告コピーとその中国語訳を具体的な分析対象として用いた。TT は ST と同様に、消費者である読者に商品を購入させるために作成された。しかし、他人との調和を重視し、相手の立場になって発言する傾向が強い ST の日本人読者とは異なり、TT の作成者が向けるのは文章の美を高く求め、明瞭な表現を好んでいる中国人読者である。中国人の読者に受け入れられるために、TT の作成者は口語的な表現が多く用いられ、読者の気持ちがたくさん綴られる ST に忠実に訳すのではなく、四字熟語などの装飾的な語句を多く使い、商品の良さを直接に読者に伝えるという作成方法を選択した。その結果、ST との類似度が非常に低いが、中国で中国人の読者とのコミュニケーションがうまく取れ、訳文テキストとして成功したのである。この具体例からも訳文作成に影響を及ぼす要因としての文化と状況コンテキストの重要性について実証できた。

第 7 章において、専門書のテキストの具体例として、稲盛和夫著『アメーバ経営—ひとりひとりの社員が主役』とその中国語訳を比較分析した。この例では、ST と TT とは同様に、経営環境が厳しいという社会・経済背景の下で作成され、目的はアメーバ経営法の詳細や効果などについて、読者に紹介することにある。そして両者とも読者を経営関係者に想定している。その結果、語彙文法層の分析から、ST と TT との共通点が非常に多いことが判明した。そして、ST と同様に、TT も読者とのコミュニケーション上の役割をうまく果たしている。ここでは、社会的背景、役割関係、目的を含む文化と状況のコンテキストが近似しているため、ST と類似度の高い TT が成立することを比較分析により明確化した。

翻訳は複合的な要因が絡み合っている、実に複雑な現象であると考えられる。そして、ST とは異なる別のテキストとして、訳文テキストは翻訳者が読者とのコミュニケーションを成功させるために実行された様々な選択行為の結果であると思われる。翻訳者が訳文テキストを作成する際、目標語社会で読者とのコミュニケーションを成功させるため、様々な制約に応じて、多様な選択肢から最適だと思われる翻訳方法や訳語を判断決定しなければならない。本論では、SFL の枠組みを全面的に用いて、既存の異なるテキストタイプの訳文テキストの分析に応用したことにより、文化の

コンテキストと状況のコンテキストが翻訳行為の行われるプロセスにおける重要な制約要素であることが判明した。そして応用分析を通じて、それらは訳文テキストが成立するのに決定的な影響を及ぼす要因であることを検証した。同時に、翻訳者の戦略を決めるのは文化と状況のコンテキストであることを分析により、確認した。

本研究では、SFLの枠組みを全面的に用いた翻訳分析モデルを提案し、文学的テキスト、広告テキスト、専門書のテキストを分析の対象として、応用分析を行ってきたが、既存の訳文テキストの具体例は様々であり、翻訳を取り巻く現象も多様であるため、様々な翻訳現象を記述することを目指していることを踏まえ、研究の対象を広げていく必要がある。また、本研究で得られた成果を踏まえた上で、より具体的に幅広く応用が可能であるように、分析モデルの充実を図っていく必要があると思われる。それを今後の課題として、今後の研究に取り込んでいきたいと思う。

.....
【著者紹介】

王 珍珍 (Wang Zhenzhen) 2000年、中国青島大学日本語学科卒業。2005年、神戸大学総合人間科学研究科修士修了。2011年、神戸大学大学院文化科学研究科博士課程修了。選択体系機能言語学を用いた翻訳研究に取り組む。